夏は実習、冬は座学で人材養成
創設から77年、農業専門校の実践

現場レポート

“農と食”北の大地から

連載第61回

札幌の地で歴史を重ねる八紘学園の体験教育

ルポライター
滝川 康治

札幌ドームにほど近い場所に広大な敷地を持つ「学校法人八紘学園 北海道農業専門学校」は、国内外で農業に関わる人材を育て続けて77年の歴史がある。一貫して体験教育を重視する一方、緑地公園的な空間にもなっている同校を訪ね、教員や学生たちの話を聞き、学園の〝いま〟と課題を取材した。

国道36号が走り、札幌ドームや店舗、マンションなどが立ち並ぶ地下鉄東豊線の福住駅周辺は、都市化する札幌を象徴するような地域である。が、同駅から徒歩で五分ほど行った、㈻八紘学園の北海道農業専門学校（河田啓一郎校長）の敷地に入ると景色が一変する。ポプラ並木や牛舎、保存された石造りのサイロ、果樹園――。六十二ヘクタールの広大な農場は、札幌の原風景を彷彿とさせる。

一九三〇（昭和5）年の創設とその歴史は古く、道内の専門学校では数少ない農業のプロを育成する場だ。札幌市民や農業関係者にとっては、校名の「…専門学校」より法人名の「八紘学園」で親しまれてきた（拙稿も後者を用いる）。

二年制の農業科が設置され、八紘寮で生活しながら、夏場は実習、冬場は座学の日々を送る。〇七年度は、全国から集まった六十四人の学生が在籍し、就農や農業関係の法人などへの就職をめざす。

全寮制で実習中心の手法に手応え感じる若者たち

冬休み直前の十二月中旬、八紘寮を訪れたわたしは夕食後のひととき、学生たちから話を聞いていた。

「種を蒔き、苦労して作物の世話をして収穫期になり、家族で『良かったな』と喜べる。それで、『農業はいいな』って思うようになったんですよ」

と、笑顔で話すのは鹿追町出身の上原典子さん（87年生まれ・2年生）である。実家は百二十ヘクタールの大規模畑作農家。「よその世界を見てきたら」という父親の勧めもあり八紘学園に進んだ。

「家の農業のことしか知らなかったけれど、ここでは一年生のときに基礎的なことを勉強でき、それが自分に合っていました。寮生活は全く初めての体験ですが、新鮮な感じがしましたね」

ここでは機械の操作や整備技術などを身につけ、卒業後は鹿追の農業研修施設で一年間実習してから家業に就く。

学生の出身校は、農業高校や農業関係の学科がある高校が半数を占める。道外出身者の比率は四割ほどだという。

横浜市出身の相澤宗明さん（88年生まれ・2年生）の実家は、乳牛六十頭を飼養する酪農家。若者には珍しく、中学生のときに牛乳を手搾りした経験もある。

県立の農業高校時代、全国の乳牛共進会でここの牛が受賞したのに興味をいだいたことが入学のきっかけだ。八紘学園では優良牛の自家繁殖を続けており、美形の牛がそろっている。

「ここにきたことで、いろんな地域に友人ができ、これからも（酪農などの）やり取りを続けられるんじゃないかな。思い出に残るのは、一年生のときの乾草収穫（右の写真参照）で、トラックを追いかけ、落ちている乾草を拾い上げる。一生に一度しかできない体験になりました」

とふり返る。実習は苦にならなかったが、不満は寮の門限が午後十時なこと。

「遊びたいときもあって、つらかったかな」（相澤さん）と屈託なく話す。卒業後は、十勝の牧場で一年間実習し、横浜へ戻って酪農の仕事を継ぐ。

非農家出身の学生も多い。父親が車の塗装業をやっている、東京出身の小林洋さん（88年生まれ・1年生）もその一人である。動物好きで都立の農芸高校に進んで畜産を勉強し、北海道に渡った。

朝五時の起床はきびしかったが、すんなり慣れた。が、農場で収穫したデントコーン（飼料用トウモロコシ）のサイロ詰め作業には音を上げたようだ。

「一週間ほど、朝から晩までサイロに入り、五人くらいでひたすら（切り刻まれた）デントコーンを足で踏むんです。しゃべると疲れるので黙々と…。単純な仕事だし、暑かったので大変でしたよ」

それでも、教室で学ぶよりも体を動かすほうが得意なので、なんとかこなした。彼は、二年次の専攻コースでは畜産を選び、人工授精師になるのが目標だ。

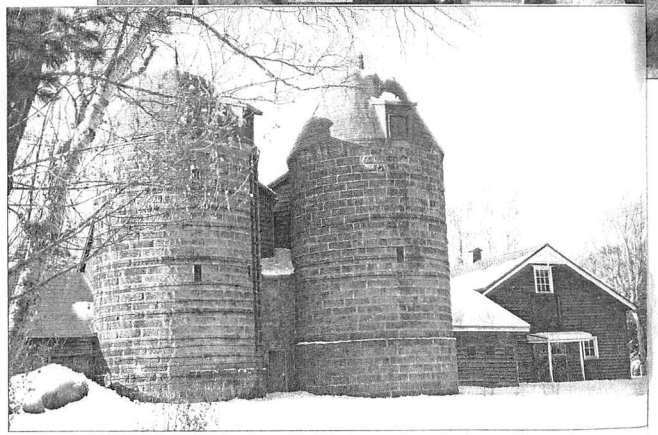
話をすると、とても素直な学生が多い。夏場は毎日のように農場に出て作業に汗を流す学園生活は、若者たちにとって得がたい体験になっている。

北海道開拓や海外移民の養成機関として学園設立

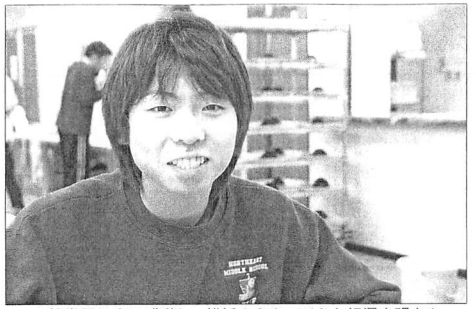
「夏場は実習、冬場は座学」の体験教育を重視するのは八紘学園の伝統である。

『八紘学園七十年史』の「創設前史」は、「『私は一個の野人である。土に産まれ、土に生き、土に死する野人である』――私たちの学園は、自らを野人と称し、農業一筋に生き抜いたある男の夢から生まれた」

という書き出しで始まる。「ある男」とは、学園の創設者にして育ての親である故・栗林元二郎氏。秋田県の稲作農家に生まれ育った同氏は、一九一九（大正8）



マンションやビルに囲まれた畑で、重さ10数kgに梱包された乾草の積み込み実習を行なう学生たち（写真右。提供／㈻八紘学園）。構内に保存されている札幌軟石のサイロは、かつて東洋一の規模を誇った（写真下）



八紘学園の牛に感動し、横浜からやってきた相澤宗明さん

「寮生活は新鮮な感じがした」と話す鹿追町出身の上原典子さん

「デントコーンのサイロ詰めは大変だった」と東京出身の小林洋さん

年に二十四歳の若さで開拓団を率いて十勝に入植して成功し、のちに移民事業の推進に奔走するようになった。

そんななかで一九三〇年、「実習本位の教育に依り拓殖事業に従事する者を養成す」との目的を掲げ、北海道開拓や海外移民の人材を育てる機関として設立されたのが「私立八紘学園」である。校名は、世界を一つの家とする「八紘一宇」にちなむ。現在地に百十三ヘクタールの農場を購入し、四年後に(財)八紘学院として設置許可。のちに植民地支配が強まるなか、学園出身者の開拓先は中国大陸へと向かい、栗林氏が卒業生らを率いて「八紘村」を建設する、といった歴史もある(別項のインタビュー記事を参照)。

戦後は、軍国主義に利用された「八紘」の文字が校名から消え「月寒学院」に改称されたが、七〇年代に復活した。学校教育法の改正を受け七六年に専修学校になり、「学校法人八紘学園　北海道農業専門学校」として現在に至っている。

開設からこれまでの卒業生は千七百二十六人。戦後は、道内外で農業を営むほか、南米移民に身を投じたり、青年海外協力隊員として活躍した卒業生も多い。

体験重視のハードな実習 直売などで地域に貢献も

創設から長い歳月が流れ学生群像も変化したが、一貫するのは「実習本位の教育」。そこに八紘学園の真骨頂がある。

「ここの特色は連続した学習ができること。たとえば、一日を通して牛と接するなかで体調の変化などが理解できるし、植物を連続して観察することで生態を学べる。大学や高校の実習ではカリキュラムに沿った模擬授業にならざるをえないが、うちは一般農家と同じ規模で、そのとき必要な作業が実習になります。そこが(他校と)根本的に違うところです」

こう言って胸を張るのは、八紘学園の卒業生でもある教学部長の宇井正保さん(49年、大阪生まれ)。学生の六割くらいは農業経験はないが、ここで実践的な教育を受けることで、「知識でなく体で覚え、即戦力になる」と力説する。

五月下旬、入学したばかりの一年生がデントコーンの種子を手で蒔きつける。機械化された現在では、一般の農家でも見られない光景だ。コーン畑の約半分にあたる三ヘクタールを手蒔きでこなす。

夏場の八紘寮の起床時刻は午前五時。ただし、一カ月に三、四回やってくる牛舎当番のときは四時に作業が始まる。点呼、体操のあと、六時半から早朝実習。そして、八時から一時間ほど教室や畑、牛舎で実習内容に即した授業を行ない、その後は夕方まで実習が続く。農業高校出身のわたしは、寮生活や実習の体験があり、三十数年前の日々が脳裏に浮かんだ。現代の若者にとって、八紘学園の実習はハードなものといえるだろう。

二年次になると、畜産と園芸(野菜・果樹・花卉の3分野)の専攻コースに分かれて実習が続く。畜産コースの学生は、門別町内にある広さ百二十八ヘクタールの日高第二農場で家畜管理も習得できる。そして冬場は、授業や実験によって知識と技術を深めていくという。

さらに、自分たちが作った農産物や乳製品は直売所で販売している。

「夏場は、選別から野菜の洗浄、袋詰めなどの作業をほぼ毎日やり、作ったものが価格にどう評価されるのか体験できる。春先の苗物から始まり、週に一、二回は売り子になるわけです」(宇井さん)

この直売所は市民に人気があり、七月になると一般に開放される菖蒲園と併せて、地域とのつながりに一役買っている。

一極集中と都市化が進む札幌市のなかで、これだけまとまった面積を持つ農場は希少であり、緑地公園的な空間といえるだろう。農業教育の場としてだけでなく、地域とのつながりや環境保全の面からも八紘学園の役割は大きい。

畑作物の生育状況などを観察する学生たち(上)。入学直後の1年生は必修のデントコーンの手蒔き実習。一般農家でも見かけない光景だ(提供／学八紘学園)

今後の運営に課題が山積 実学プラスαで発展の道を

高校卒業後の若者を対象にした農業教育の場としては、他にも農学系の大学や短大、道立農業大学校、自治体の研修牧場などがある。このうち、八紘学園とよく似た教育機関は本別町にある農業大学校だろう。同校には道内の農高出身者が数多く入学しており、「現在のところ定員割れはなく、今後も先細りの懸念はない」(道農業経営課)という。

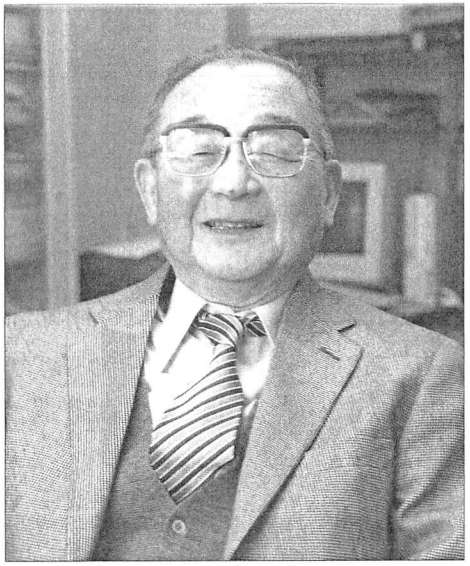
八紘学園では、一学年三十五人の定員をほぼ確保しているが、農業後継者が減るなかで楽観視できない。学校の運営には年間三億円の費用がかかり、農場からの収入を差し引くと二億円程度の赤字という。過去の敷地の売却で得た資金の運用で対応しているが、先行きは不透明のようだ。運営面でも難しい時代を迎えた。

「実習本位の教育」は貴重な実践といえるが、「農と食」をめぐる環境は大きく変わっている。今後はより消費者を意識し、「食べる側」に発信できる人材を育てないと先細りになるのではないか、と今回の取材を通じて思った。実学に加え、グリーンツーリズムやスローフード、地産地消、有機農業などにもすそ野を広げ、現代社会のなかで農業に生きる哲学を学んでいくような学校になれば、素晴らしい教育機関に発展できるのではないだろうか。

■学校法人・八紘学園 北海道農業専門学校
札幌市豊平区月寒東2条14丁目1－34
☎011・851・8236
FAX011・851・8269
http://www.hakkougakuen.ac.jp/

実学を基本に広く経験できる魅力

学校法人 八紘学園 北海道農業専門学校校長 河田 啓一郎さん



かわだ・けいいちろう
1927年秋田県生まれ。北海道大学農学部獣医学科卒業。北大助教授、酪農学園大学教授、同大獣医学科長などを歴任（専門は家畜繁殖学）。97年から学校法人・八紘学園 北海道農業専門学校の第8代学校長

いまも生きる教育の理念

——八紘学園と校長との出会いは？

北大農学部の初代獣医学部長を務めた黒沢亮助先生がわたしの恩師で、ここに講義に来ておられた。全道の獣医師会長などもやられて多忙のとき、「君、行ってきてくれや」という感じでね（笑）。大学院にいた昭和二十七、八年のことでした。それが始まりです。

——当時はどんな雰囲気でしたか。

住宅地は全然なくて牧場ばかりで、国道36号から入ってくるとリンゴ農家があり、北大正門前から市電に乗り、定山渓鉄道の豊平駅で降りる。ここは冬だけ授業をやる学校ですから、豊平駅からどうやって来たと思います？

——馬橇じゃないですか。

ピンポンですね（笑）。馬橇が迎えに来ていて、「シャンシャン」とここまで。途中でカーブを曲がるとき、引っくり返ったり（笑）。木造校舎に大きな薪ストーブがあり、（八紘学園の）西岡山林農場から伐った薪をどんどんくべる。でも、風向きによって煙が逆流して教室が煙だらけになり、「今日は黒板が見えないから休講だ」（笑）。面白い時代でしたね。

——「自耕自拓」を教育理念に掲げてきましたが、これがめざすものは？

もともと開拓民を養成しており、そこから出てきた言葉です。満州開拓で「八紘村」をつくったり、戦後は主にブラジルへ五十人ほどの卒業生が行っています。日系人の子弟が二十人ほど入学し、南米とは密接なつながりがあった。創設者の栗林元二郎さんは、満州開拓の後始末で地元民を大事にしました。（敗戦後）あちこちの開拓団では、ソ連軍の襲撃だけでなく、地元民の蜂起に遭った。開拓といえば聞こえはいいが、そこにいる人を押し退けて入ったわけで、怒りを買うのは当たり前。ところが、栗林さんは現地の人たちを雇って日本人と同じ給料を与えた。それが戦後、逆に日本の開拓民を保護してくれ、八紘村では一人も犠牲者が出なかったといいます。

——理念はどう生かされていますか。

二百万都市のど真ん中で広大な学園農場を維持できたのは、そうした建学の精神があったからです。学生も広いキャンパスで畑を耕し、農作物を育て、牛を飼い乳を搾る——そうした生活を二年間やることで、環境から教育される面が多い。

実践が特色、憩いの場にも

——高校を卒業した世代の農業教育の場として、八紘学園の独自性は？

本校は最初から私学で、官学の道立農業大学校との違いがあります。酪農学園短大などと同様の教育もありますが、うちでは実践的なことを教えてもらえる。最近、とわの森三愛高校（注＝酪農学園大の付属高校）から入ってくる学生が多いんですよ。現在の一年生が四人、二年生が三人、今回受験したのが五人おり、だんだん増えています。

大学全入時代なので、とわの森から短大や大学へ進むのは門戸は広いんですが、積極的に勧誘しなくても入学してきます。「帰ってすぐ親父を助けていくんだ」という農家の子弟には、本校のやり方のほうがすぐに役立つ。とくに、牛が好きで共進会に興味を持つ者にとっては、うちの牛のほうが大学よりも立派ですからね。

——実践的なところが魅力だ、と。

それが大きいんじゃないですか。酪農をやる人でも、一年生で野菜や花、果樹について一通り習うので、農業を広く経験できることも特色だと思います。直売所も設け、「作りさえすればいい」というのではなく、自分で付加価値をつけ売るまでいかないと経営は成り立たない、と体験できることも魅力の一つです。

——直売所は人気だそうですね。二階が広いのでレストランや喫茶店にしては。

うちの野菜だけだとすぐ売れてお客さんに怒られるもんですから、札幌市農協や石狩市農協から農産物を卸しています。二階部分はイベントに貸していますよ。

——地域とのつながりはどうですか？

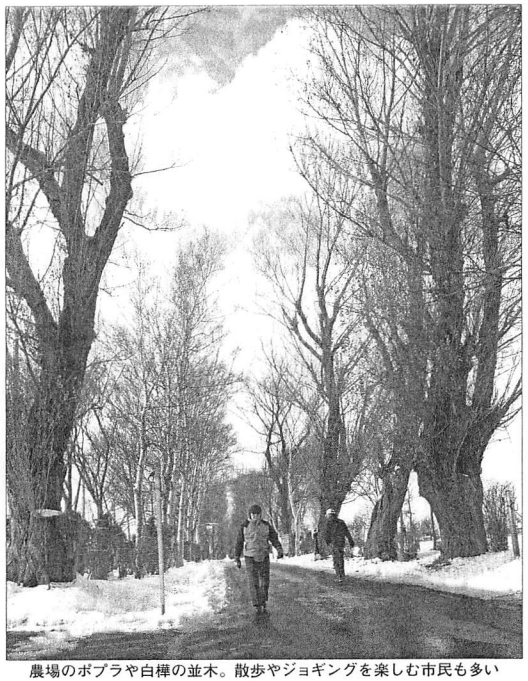
直売所や菖蒲園、それに「成吉思汗（ジンギスカン）倶楽部（クラブ）」もやっており、市民の憩いの場所になっている。柵もなく自由に出入りできるので、散歩やジョギング、犬の運動をする人もいます。そのくせ、堆肥の臭いが漂ってきたりすると、すぐ保健所に電話したり、110番通報したり…（笑）。昔からの住民は堆肥の臭いも分かっていますが、周囲にマンションがどんどん増えているでしょ。町のなかでの酪農は本当に大変です。

——牛舎特有の臭いもほとんどしないし、牛もきれいで問題ないですけどね。

幼稚園児や小学生がしょっちゅう見学にきますから、牛舎が汚かったり、臭いと牛乳嫌いになりますからね。

——市民の憩いの場として貴重ですね。

栗林さんは、ここを将来的には田園公園にしようと、沙流川から大きな石を集めたりした。菖蒲園の上のほうに、多いときは二百頭くらいポニーを放牧してね。昔は月寒グリーンドームもなく、稜線があって藻岩山が見え、景色が良かった。



農場のポプラや白樺の並木。散歩やジョギングを楽しむ市民も多い

加工部門の発展もめざす

——少子化で頭を悩ませているのでは。

いまは定員近く入学していますが、だんだん学生が集まらなくなったときの問題があります。それでも、本校では学生の授業料はすごく安いですからね。

——年間十二万円の授業料と聞き、びっくりしました。月一万円ですからね。

幼稚園に預けると月に二万円だそうです。寮だって月額三万円で三食と昼寝付きだから（笑）。学生からの収入はせいぜい年間二千万円くらいで、学生数が多くなると持ち出しが増えるくらいですよ。

——基金で運用しているそうですね。

産業共進会場の周辺や小学校一校、北野通りの用地などへの売却代金を銀行に預け、その利息でやってきたんです。昔は基金の利息だけで職員の給料を払い、学生に食べさせることができた。それが、ゼロ金利時代で原資が減っています。

——実学を柱にしつつ、農業の多面的価値という時代の要請に応えた教育を学校の売りにしていくと素晴らしくなる。

一つは、生産物の加工技術です。バターやヨーグルト、アイスクリームを製造していますが、チーズは手がけていない。実習で肉加工もやりますが、販売には至っていません。加工施設を有効に利用し、製品を販売することで経営のノウハウを覚え、学生が自信を持つ教育ができるかどうか——そうした方向が一つあるでしょう。「成吉思汗倶楽部」の充実を図ったり、ポニーを置いて子どもたちに楽しんでもらうこともできますね。パークゴルフ場なども考えられるかもしれません。